

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 23 日現在

機関番号：47701

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：H21 ～ H23（H23 年度繰越）

課題番号：21830024

研究課題名（和文） 日本版ゆるし状態尺度の作成

研究課題名（英文） Development of the State Forgiveness Inventory for Japanese

研究代表者 石川満佐育（ISHIKAWA MASAYASU）

鹿児島県立短期大学・生活科学科・講師

研究者番号：00512063

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は近年諸外国の臨床心理学の中で重要とされるゆるしの観点から介入方法を考案することを視座におき，介入時にアセスメントツールとして使用可能な「日本版ゆるし状態測定尺度（State forgiveness Inventory for Japanese；以下 SFI-J）」を作成することであった。大学生，短期大学生を対象に，予備調査から項目作成を行い，探索的因子分析，信頼性，妥当性の検討を行った結果，感情，認知，行動の3領域からとらえることができ，ある程度の信頼性と妥当性を兼ね備えた尺度が開発された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the study was to develop the inventory that enable the measurement of the state forgiveness(State forgiveness Inventory for Japanese; SFI-J), and to substantiate the reliability and validity of the new inventory for Japanese. As a result of a pilot study and an explanatory factor analysis of data from university and junior college students, the SFI-J was composed of three domains of feeling, cognition, and behavior (feeling : 5 factors, 29 items ; cognition : 4 factors, 28 items ; behavior : 4 factors, 25 items). The results also showed that the SFI-J was moderately reliable and valid for measuring state forgiveness in university and prefectural college students.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	850,000	255,000	1,105,000
2010 年度	880,000	264,000	1,144,000
2011 年度			
総計	1,730,000	519,000	2,249,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：ゆるし・状態ゆるし尺度・アセスメントツール

1. 研究開始当初の背景

他者から受けた侵害や被害に対応する方略の代表的なものには回避と報復がある。これらの対応は正常で一般的ではあるが，過度に用いられ続けると，本人にとっても，その人間関係にとっても，しいては，社会に対しても否定的な結果をもたらすことがある（負のスパイラル）。現在我が国の様々な心理社会的不適応（例えば，暴力事件，引きこもり，

抑うつ傾向など）も，侵害・被害体験の反応によってもたらされた否定的な結果と考えられるものが多い。

本研究では，最近の諸外国の臨床心理学，社会心理学で急速に注目を集め，負のスパイラルの解決，軽減に有効な概念とされているゆるし（forgiveness）の概念に注目する。諸外国の実証研究からゆるしは精神的健康，心理的 well-being と正の関連があることが

示されている (Thompson et al., 2005)。また、臨床心理学の分野でも、心理的介入方法の 1 つとして、ゆるしが注目されている。Wade et al. (2005) は、ゆるしの観点から検討が行われた介入研究についてメタ分析を行い、ゆるしを促進することの有効性を示唆している。さらに、Enright, Fitzgibbons (2000) は、ゆるしを促進することで主症状の軽減を目指す Forgiveness Therapy を実践し、うつ病の治療、トラウマの治療、夫婦間葛藤の解決などに有効であることを明らかにしている。

我が国において不適応の軽減、予防に対する取り組みが様々な観点から行われている。その中で、諸外国で有効性が示されているゆるしに焦点をあてることは、我が国の問題を鑑みても、必要であり意義があると考えられる。つまり、我が国においても、ゆるしに焦点をあてた介入方法を考案していくことが、必要であり意義のあることだと考えられる。

ところで、臨床心理学においては、クライアントの症状や病状を評価することは重要なプロセスとされ、介入を行なう際、その効果を検討するためのアセスメントツールが必要となる。先述した Forgiveness Therapy に関しては、Enright et al (2000) は、ゆるしを測定するアセスメントツールとして、Enright Forgiveness Inventory (以下 EFI) を使用している。EFI は、ゆるしの促進がなされているかを測定する尺度で、現在のゆるしの状態を測定するものである。

我が国ではゆるしに関する研究は始まったばかりであり、介入方法を考案していくためには、我が国におけるゆるしの研究を積重ねていく必要がある。その一環として、EFI のような我が国における「ゆるしの状態」を測定するアセスメントツールが必要であると考えられる。現在我が国においても、ゆるしを測定する尺度がいくつか開発されている (石川・濱口, 2007; 加藤・谷口, 2009; 田中, 2008)。DeShea (2008) は、諸外国で使用されているゆるしの尺度を概観した結果、特性ゆるし (trait forgiveness) を測定する尺度と状態ゆるし (state forgiveness) を測定する尺度に分類することができると指摘している。EFI は状態ゆるしを測定する尺度と考えられている。一方、我が国で開発された尺度は、すべて特性ゆるしを測定している尺度といえる。従って、我が国では、状態ゆるしに関する尺度の開発はなされていないといえる。

2. 研究の目的

本研究では、近年諸外国の臨床心理学の中で重要とされるゆるしの観点から介入方法を考案することを視座におき、介入時にアセスメントツールとして使用可能な「日本版ゆ

るし状態測定尺度 (State forgiveness Inventory for Japanese ; 以下 SFI-J) を作成することを目的とする。本研究は 3 つの研究から構成される。研究 1 では、まず自由記述の質問紙調査、諸外国の尺度を参考に SFS-J の尺度項目の作成を行う。次に作成された尺度項目を用いて質問紙調査を実施し、尺度構成を行うことを目的とする。研究 2、研究 3 では、SFI-J の信頼性、妥当性を検討することを目的とする。研究 2 では、主に他の尺度との関連を検討し、研究 3 では短期縦断研究を行い基準関連妥当性について検討する。また、本研究では諸外国の定義等を参考に、状態ゆるしを「不当な行為を行った相手に対するネガティブな反応(感情, 認知, 行動)が低減され、ニュートラル, ポジティブな反応が生じている状態」と操作的に定義する。

状態ゆるしのアセスメントツールを作成するにあたり、Enright et al (2000) による EFI は世界各国で翻訳されていることを考えると、我が国においても EFI を邦訳して使用することが考えられる。しかし、アメリカは怒りの表出を許容する社会であること

(Enright, 2001)、一般的に、我が国は相互協調的自己感が高いこと (高田, 2004) を考慮すると、EFI と同様の項目で測定できるか疑問である。従って、本研究では、予備調査から項目収集を行い、我が国におけるゆるしのアセスメントツールを独自に開発していくこととする。また、現在のところ、ゆるしの状態の測定に関する諸外国の研究は、主に大学生から成人を対象に行われている。従って、本研究においても大学生を対象に SFI-J の作成を行っていくこととする。

3. 研究の方法ならびに結果と考察

研究 1 「SFI-J の尺度構成」

【研究 1 の目的】

研究 1 では、SFI-J の尺度構成を行うことを目的とした。まず、予備調査を実施し項目作成を行った。次に本調査を実施し、探索的因子分析によって尺度構成を行った。

①予備調査 (項目作成)

予備調査では SFI-J の項目を収集し、予備調査の結果をもとに項目を作成することを目的とした。予備調査では自由記述による質問紙調査を実施した。

自由記述による質問紙では、(1)ゆるしていない状態に関する項目、(2)ゆるしている状態に関する項目を、感情、印象・イメージ、行動の 3 側面について尋ねた。大学生、短大生 106 名 (男性 29 名, 女性 77 名; 平均年齢 19.93 ± 1.78 歳) であった。領域ごとに短大生 3 名、大学院生 1 名によって KJ 法 (川喜多, 1967) によって分類を行なった。その結果、ネガティブな表現、ポジティブな表現を含め、感情領域では 237 個、イメージ・印象領域では

106 個、行動領域では 193 個、その他 146 個に分類された。自由記述から得られた項目は多数得られたため、自由記述の結果を基に、心理学を専門とする大学院生、一般成人 5 名を対象に面接調査を実施し項目内容の検討を行った。項目の検討を行った結果、80 項目からなる SFI-J (ver.1) が作成された。

80 項目からなる SFI-J を短期大学生 57 名対象に実施した (6 件法で回答)。調査協力者には回答の分かりにくさ等も求め、他に尺度の項目として妥当なものがあるかどうかも尋ねた。その結果、より具体的な表記にする必要と、認知領域の項目の再検討の必要が判断されたため、予備調査の結果も再検討し、項目の修正、追加を行った。その結果、最終的に 102 項目 (感情領域 38 項目、認知領域 34 項目、行動領域 30 項目) の SFI-J (ver.2) が作成された。

②本調査

本調査では予備調査で作成された SFI-J (ver.2) について探索的因子分析を行い、尺度構成を行うことを目的とした。

【研究 1 (本調査) の方法】

調査対象者

茨城県内の大学生、鹿児島県内の短大生計 352 名 (男性 113 名、女性 239 名) を対象に質問紙調査を行った。

質問紙の内容

①年齢、性別、②ゆるせないと感じた経験の有無 (2 件法、1 項目)、③ゆるせなかったと感じた出来事 (自由記述)、④ゆるせないと感じた相手の属性 (7 つの選択肢から 1 つを回答)、⑤ゆるせないと感じた相手との当時の親しさ (4 件法、1 項目)、⑥ゆるせないと感じた出来事の時期 (4 件法、1 項目)、⑦ゆるせないと感じた出来事的重要性 (6 件法、1 項目)、⑧ゆるせないと感じた出来事に対する傷つき度 (6 件法、1 項目)、⑨SFI-J (6 件法、102 項目 (感情領域 38 項目、認知領域 34 項目、行動領域 30 項目))

手続き

講義に出席した学生に対して一斉配布による質問紙調査を行った。調査実施の際には、調査実施前に、対象の学生に対して調査結果はすべて統計ソフトによって分析されるためプライバシーが侵害されることは一切ないこと、回答したくない項目に関しては回答の拒否をしても良いことを、また、回答を拒否したことによって、調査対象者が不利益を被ることは一切ないという旨を質問紙の表紙に記載した上で、さらに口頭での説明を加えた。本調査は無記名で行われた。

【研究 1 (本調査) の結果と考察】

得られたデータのうち、回答に不備があるものを削除し、さらに、ゆるせないと感じた経験があると答えた 317 名 (男性 85 名、女性 232 名; 平均年齢 20.60 ± 3.66 歳) を分析

対象とした。

102 項目の中で得点に著しく偏りの認められる項目もあったが、作成された全ての項目は状態ゆるしの項目として妥当であると判断し、除外せず分析を行うこととした。探索的因子分析を行う際は、各領域ごとに因子分析を行うこととした。

感情領域 38 項目に対して、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、初期解の固有値が 1.0 以上であることと解釈可能性から、6 因子を最適と判断した。負荷量の小さかった 7 項目を削除した後、31 項目に対して再度因子分析を行った結果、第 1 因子から順に、相手に対する肯定的感情 (8 項目)、敵意感情 (6 項目)、自責感情 (5 項目)、悲哀感情 (4 項目)、派生的肯定感情 (4 項目)、受容感 (4 項目) の 6 つの因子が抽出された。

認知領域 34 項目に対して、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、初期解の固有値が 1.0 以上であることと解釈可能性から、5 因子を最適と判断した。負荷量の値が .40 以下の 5 項目を削除した後、29 項目に対して再度因子分析を行った結果、第 1 因子から順に、相手に対する肯定的イメージ (9 項目)、相手に対する否定的イメージ (8 項目)、敵意的思考 (4 項目)、反省的思考 (4 項目)、肯定的思考 (4 項目) の 5 つの因子が抽出された。

行動領域 30 項目に対して、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、初期解の固有値が 1.0 以上であることと解釈可能性から、5 因子を最適と判断した。負荷量の値が .40 以下の 4 項目を削除した後、再度因子分析を行った結果、第 1 因子から順に、相手に対する肯定的行動 (8 項目)、攻撃行動 (6 項目)、積極的拒否行動 (5 項目)、受動的拒否行動 (3 項目)、普段と変わらない行動 (4 項目) の 5 つの因子が抽出された。

研究 1 では、感情領域 31 項目、認知領域 29 項目、行動領域 26 項目計 86 項目から構成される SFI-J が作成された。しかし、SFI-J の項目に回答してもらうための「ゆるせなかった相手、出来事に関する情報」について尋ねる項目 (本調査質問紙の内容②~⑧) に課題が残された。

1 つめは、ゆるせなかった出来事の相手との関係の問題である。Worthington (2005b) は、ゆるす相手について、今後関係性を継続させる必要がある他者か、そうでない他者かは分けて検討することが望ましいと述べている。研究 1 では出来事が起こった際の親しさに尋ねているが、今現在の関係については尋ねていない。従って、今後ゆるせなかった出来事の情報を探る際には、①現在、関わる (会う) 機会があり、今後も関わる機会がある相手、②過去に関わりがあったが、今現

在、関わる機会がなく、今後も関わる機会がない相手を分けて検討する必要があると考えられる。2 つめは、今現在対象となる相手をゆるしているかどうかの基準の設定の問題である。本研究では、ゆるせなかった出来事の有無を尋ね、その相手に対して尺度の項目においてゆるしの状態を測定している。しかし、尺度の測定方法が 6 件法であるため、完全にゆるしている状態であっても全ての項目で最低点をつけることは稀である。EFI を作成した Enright et al (2000) は、EFI の他に 1 項目 (5 件法) で、EFI で回答した相手をゆるしているかを尋ねている。本研究においても、SFI-J で回答した相手をゆるしているかを尋ねる項目を設け、その項目を基準に今現在ゆるしているかいないかを判断する必要があると考えられる。

以上 2 つの課題を反映させた質問紙の内容を構成し今後の検討を行うこととする。

研究 2 「SFI-J の信頼性・妥当性の検討」

【研究 2 の目的】

研究 2 では、SFI-J の信頼性・妥当性を検討することを目的とした。まず、関係の持続性に基づく分類を行い、分類ごとに因子構造を確認し、内的一貫性の観点から信頼性の検討を行った。次に、既存の尺度 (ネガティブな反すう尺度、怒り喚起・持続尺度、許し尺度) との関連を検討した。さらに、ゆるせなかった出来事に関するデータに基づき、SFI-J 得点の比較の検討を行った。

【研究 2 の方法】

調査対象者

東京都、茨城県、岐阜県内の大学生、鹿児島県内の短大生計 505 名 (男性 207 名、女性 298 名) を対象に質問紙調査を行った。なお、調査対象者の負担を考慮し、サンプル 1 では①～⑩を実施し (サンプル 1 : 252 名)、サンプル 2 では①～⑨、⑫を実施した (サンプル 2 : 253 名)。

質問紙の内容

①年齢、性別、②関係の持続性別のゆるせないと感じた経験の有無 (a. 現在、関わる (会う) 機会があり、今後も関わる機会がある相手、b. 過去に関わりがあったが、今現在、関わる機会がなく、今後も関わる機会がない相手、のうちどちらかを選んでもらい③～⑨に回答してもらった。)、③ゆるせなかったと感じた出来事 (自由記述)、④ゆるせないと感じた相手の属性 (7 つの選択肢から 1 つを回答)、⑤ゆるせないと感じた相手に対する現在のゆるしの程度 (10 件法、1 項目)、⑥ゆるせないと感じた相手との当時の親しさ (4 件法、1 項目)、⑦ゆるせないと感じた出来事の時期 (4 件法、1 項目)、⑧ゆるせないと感じた出来事的重要性 (6 件法、1 項目)、⑨ゆるせないと感じた出来事に対する傷つき度

(6 件法、1 項目)、⑩SFI-J (6 件法、86 項目 (感情領域 31 項目、認知領域 29 項目、行動領域 26 項目))、⑪ネガティブな反すう尺度 (伊藤・上里、2001 ; 6 件法 ; 14 項目)、⑫怒り感情喚起・持続尺度 (渡辺・小玉、2001 ; 5 件法 ; 26 項目)、⑬許し尺度 (加藤・谷口、2009 ; 4 件法 ; 22 項目)

手続き : 研究 1 (本調査) の手続きと同様

【研究 2 の結果と考察】

得られたデータのうち、回答に不備があるものを削除した結果、分析対象者は 483 名 (男性 196 名、女性 287 名 ; 平均年齢 19.98 ± 1.25 歳) であった。サンプル 1 は 242 名 (男性 100 名、女性 142 名 ; 平均年齢 19.36 ± 3.80 歳)、サンプル 2 は 241 名 (男性 96 名、女性 145 名 ; 平均年齢 20.01 ± 1.20 歳) であった。

①因子構造の確認並びに内的一貫性の検討

得られたデータ 483 名分に対して SFI-J の 3 領域ごとに探索的因子分析を行った。その結果、各領域において研究 1 で得られた結果とは若干異なる因子構造が得られた。

まず、感情領域では、5 因子構造が得られた。研究 1 との違いは受容感の因子が抽出されず、他の 3 つの因子にそれぞれ負荷し、そのうちの 2 項目の負荷量は .40 以下であった。負荷量が .40 の 2 項目を削除し、29 項目に対して因子分析を行った結果、研究 1 の受容感を除く 5 因子構造とほぼ同様の因子 (受容感の 2 項目は相手に対する肯定的感情に負荷) が構成された。また、現在ゆるしているか否かの分類、関係が持続しているか否かによる分類、性差による分類によって因子分析を行ったが、ほぼ同様の構造が確認された。最終的に抽出された因子の命名は、第 1 因子から順に、相手に対する肯定的感情 (10 項目)、敵意感情 (6 項目)、自責感情 (5 項目)、悲哀感情 (4 項目)、派生的肯定感情 (4 項目) とした。各因子の α 係数は、.77～.93 で高い値が得られた。従って、感情領域における今後の検討では 5 つの下位尺度を構成し検討を行うこととした。

認知領域では、4 因子構造が得られた。研究 1 との違いは肯定的思考の因子が抽出されず、肯定的思考の全ての項目が、第 1 因子である相手に対する肯定的イメージに負荷していた。5 因子設定による因子分析も行ったが研究 1 のような因子構造は確認されなかった。また、反省的思考の 1 項目の負荷量は .40 以下であった。負荷量が .40 の 1 項目を削除し、28 項目に対して因子分析を行った結果、4 因子構造が構成された。また、現在ゆるしているか否かの分類、関係が持続しているか否かによる分類、性差による分類によって因子分析を行ったが、ほぼ同様の構造が確認された。最終的に抽出された因子の命名は、第 1 因子から順に、相手に対する肯定的イメージ (13 項目)、相手に対する否定的イメージ

(8項目)、敵意的思考(4項目)、反省的思考(3項目)とした。各因子の α 係数は、.82～.95で高い値が得られた。従って、認知領域における今後の検討では4つの下位尺度を構成し検討を行うこととした。

行動領域では、4因子構造が得られた。研究1との違いは積極的拒否行動と受動的拒否行動因子の項目が、まとめて1つの因子を構成した。5因子設定による因子分析も行ったが研究1のような因子構造は確認されなかった。また、攻撃行動の1項目の負荷量は.40以下であった。負荷量が.40の1項目を削除し、25項目に対して因子分析を行った結果、4因子構造が構成された。また、現在ゆるしているか否かの分類、関係が持続しているか否かによる分類、性差による分類によって因子分析を行ったが、同様の構造が確認された。最終的に抽出された因子の命名は、第1因子から順に、相手に対する肯定的行動(8項目)、拒否的行動(8項目)、攻撃行動(5項目)、普段と変わらない行動(4項目)とした。各因子の α 係数は、.62～.90で、普段と変わらない行動の値がやや低い値であったが、その他の因子では高い値が得られた。従って、行動領域における今後の検討では4つの下位尺度を構成し検討を行うこととした。

②性差の検討

SFI-Jにおける下位尺度ごとの性差の検討を行うために、 t 検定を行った。その結果、自責感情、悲哀感情、攻撃行動において性差がみられた。自責感情、悲哀感情では女子のほうが男子よりも有意に得点が高く、攻撃行動では、男子のほうが女子よりも有意に得点が高かった。その他の変数において性差はみられなかった。

③現在ゆるしているか否かの分類、関係が持続しているか否かの分類による検討

現在ゆるしていない相手があり、その相手と関係が継続している群(N=257名)、現在ゆるしていない相手があり、その相手と関係が継続していない群(N=80名)、過去ゆるしていなかったが、現在はゆるしている群の3群(N=146名)に分け、SFI-Jの下位尺度ごとに3群における一元配置の分散分析を行った。その結果、自責感情、反省的思考以外の下位尺度において有意な差がみられた。有意な差がみられた下位尺度の全てにおいて、肯定的な側面を測定する下位尺度(例えば、相手に対する肯定的感情、相手に対する肯定的イメージ)では、現在ゆるしている群のほうが得点が高く、否定的な側面を測定する下位尺度(例えば、敵意感情、相手に対する否定的イメージ)では、現在ゆるしている群のほうが得点が低く、予測と一致する結果であった。

④SFI-Jと基準尺度との関連の検討

妥当性を検討するために、SFI-Jと基準尺度との相関を求めた。その結果、ほぼ予測さ

れた相関の結果が得られた(ネガティブな反すう $r=.17\sim.27$, $p<.05$; 怒り喚起 $r=.14\sim.38$, $p<.05$; 怒り持続 $r=.15\sim.43$, $p<.05$; 寛容さ $r=.16\sim.33$, $p<.05$; 恨み $r=.13\sim.47$, $p<.05$)。従って妥当性が確認されたと判断した。

以上4つの観点から検討を行った結果、検討の結果、概ね予測通りの結果が得られ、SFI-Jは十分な信頼性、妥当性を備えた尺度であることが確認された。

研究3「SFI-Jの基準関連妥当性の検討」

【研究3の目的】

研究3では、SFI-Jの基準関連妥当性を検討することを目的とした。諸外国の研究から、ゆるしの促進に寄与する概念として、共感性(Empathy)が挙げられている。また、ゆるしを行うためには自分の気持ちを把握し、不快な情動とも向き合うことの重要性が指摘されている。従って、共感性を測定する尺度に加え、不快情動回避心性尺度との関連を検討することとした。関連要因の検討については、従来の横断研究だけでなく、縦断研究の必要性が指摘されている。従って、本研究では、短期縦断研究を行い因果関係の観点からも検討を行うこととした。また、諸外国において Forgiveness Therapy を行っている Enright, Fitzgibbons (2000) は、ゆるしが促進されると不適応状態が軽減するという観点から検討を行っている。その一方で、Brown (2003) は、抑うつや不安の症状がゆるすことを抑制するという因果関係の可能性について指摘をしている。つまり、不適応傾向にあるとゆるすことが困難になるという観点である。両者の指摘は十分に考えられるが、実証的な研究は行われていない。本研究では、人生に対する満足感尺度を用いて、不適応の指標ではなく適応の指標の観点から検討を行い、適応とゆるしの関連の検討を短期縦断研究によって検討した。

【研究3の方法】

調査対象者

鹿児島県内の短大生計131名(全て女性)を対象に質問紙調査を行った。

手続き

まず、1回目の調査では、質問紙Aと質問紙B-1に回答してもらった。2回目の調査では、1回目に回答してもらった質問紙Aと質問紙B-2を配布し、質問紙Aを参考にB-2について回答してもらった。以上のことから同じ出来事を想定させ、その出来事について現在のゆるしの状態について回答できるようにした。下記の質問紙の内容①～⑩について、質問紙Aでは①～⑨を、質問紙B-1では⑩～⑮を、質問紙B-2では⑤、⑩～⑮を記載し、回答を求めた。実施の説明等については、研究2の手続きと同様であった。また、1回

目と2回目の調査対象者を同定するために学籍番号を記載してもらった。

質問紙の内容

①～⑩は研究2と同様、⑪視点取得尺度(鈴木・木野, 2008; 5件法; 5項目)、⑫他者感情への感性尺度(植村ら, 2008; 5件法; 5項目)、⑬情動の表現と命名(豊田らが作成した日本語版 ESCQ 尺度の情動の表現と命名から5項目を抜粋して使用, 2005; 5件法, 5項目)、⑭不快情動回避心性尺度(福森・小川, 2005; 7件法, 10項目)、⑮人生に対する満足尺度(角野, 1994; 7件法, 5項目)

【研究3の結果と考察】

得られたデータのうち、回答に不備があるものを削除し、1回目と2回目の同定を行った結果、分析対象者は118名(全て女性; 平均年齢18.60±0.66歳)であった。

1回目と2回目のデータを用いて本研究では共分散構造分析を行った。分析は領域ごとに行い、ターゲットとなる変数を1つずつ使用した。例えば、感情領域でターゲットとする変数を視点取得とした場合、第1水準には1回目(pre)の感情領域の5変数に1回目の視点取得の変数を加えた6つ変数を用い、それぞれの変数の間に共変関係を設定した。第2水準には2回目(post)の感情領域の5変数に2回目の視点取得の変数を加えた6つ変数を用い、それぞれの変数の間に共変関係を設定した。初期モデルでは2水準にわたり全ての可能な変数の組み合わせについて、第1水準→第2水準の方向にパスを設定した。ターゲットとなる変数は5変数とし、3領域にわたって上記の設定を行い、計15回の共分散構造分析を行った。初期モデルによる共分散構造分析の結果で、有意にならなかったパスと相関を削除して修正モデルを構築し、再度分析を行うという手順で行った。

その結果、感情領域、不快情動回避心性尺度を用いた共分散構造分析において、pre不快情動回避心性からpost相手に対する肯定的感情に有意な負のパスが得られた($\beta=-.23$, $p<.01$; $\chi^2(25)=32.96$, $p>.05$, GFI=.96, CFI=.99, RMSEA=.052)。認知領域、不快情動回避心性尺度を用いた共分散構造分析において、pre不快情動回避心性からpost相手に対する肯定的イメージに有意な負のパスが得られた($\beta=-.22$, $p<.01$; $\chi^2(16)=21.50$, $p>.05$, GFI=.97, CFI=.99, RMSEA=.054)。また、pre不快情動回避心性からpost相手に対する否定的イメージに有意な正のパスが得られた($\beta=.17$, $p<.05$)。行動領域、情動の表現と命名尺度を用いた共分散構造分析において、pre情動の表現と命名からpost相手に対する肯定的行動に有意な正のパスが得られた($\beta=.16$, $p<.05$; $\chi^2(16)=27.40$, $p<.05$, GFI=.96, CFI=.98, RMSEA=.078)。行動領域、不快情動回避心性尺度を用いた共分散

構造分析において、pre不快情動回避心性からpost相手に対する肯定的行動に有意な負のパスが得られた($\beta=-.20$, $p<.05$; $\chi^2(16)=29.05$, $p<.05$, GFI=.96, CFI=.97, RMSEA=.083)。以上の結果から、不快情動回避心性は、相手に対する肯定的感情、相手に対する肯定的イメージ、相手に対する肯定的行動を低め、相手に対する否定的イメージを高めることが示された。また、情動の表現と命名は、相手に対する肯定的行動を高めることが示された。

以上、本研究の結果から、状態ゆるしを促進する要因として、不快情動回避心性の低さが特に影響していることが明らかになった。この結果は、ある程度先行研究の知見とも一致する結果が得られたことをふまえると、本研究の成果といえることができる。一方、適応の指標として取り上げた人生の満足度については予測した結果は得られなかった。今後は、先行研究を参考に、抑うつや不安といった不適応の指標を用いて検討することが必要でなろう。さらに、本研究はサンプル数が少なく女子短大生を対象にした調査であったため、より一般化するためにもサンプル数を増やし、詳細な検討を行うことが今後の課題である。

4. 研究成果

大学生を対象に、感情、認知、行動の3領域からとらえることができ、ある程度の信頼性と妥当性を兼ね備えた状態ゆるしを測定する尺度 SFI-J が開発されたことは、本研究の成果といえる。

今後は、実際にゆるせないと感じている人に対して、SFI-J を実施し、経過を詳細に追跡することによって、SFI-J の妥当性をさらに高める検討が必要であるとともに、ゆるしの観点からの介入方法の考案が望まれる。

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計1件)

学会発表

石川満佐育 状態ゆるし尺度の作成の試み
(1)～項目作成のための予備的研究～ 2011年9月17日 第75回日本心理学会 於：日本大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石川満佐育 (ISHIKAWA MASAYASU)

鹿児島県立短期大学・生活科学科・講師

研究者番号： 00512063

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし